

第2章

水平線の彼方から

——西洋近代文明の太平洋進出と太平洋島嶼王国の興亡——

第1節 西洋人の登場

テラ・アウストラリス・インコグニタ（未確認南方大陸）を目指す英・仏の探検競争は1765年、ジョン・バイロン率いるイギリス隊によって幕が切って落とされた。太平洋上の未知の巨大大陸を求めるバイロン隊は太平洋を奇蹟的にも島一つとして遭遇することなく横断してしまったが、その後ウォリス（1766年）、カーテレット（1766年）、第一次クック（1768年）、第二次クック（1772年）、第三次クック（1776年）などの船隊が次々と太平洋探検へと向かっていった。

一方フランスもブーゲンヴィル（1766年）、シュルヴィル（1769年）、マリオン＝デュフレヌ（1771年）、ラペルーズ（1785年）隊を相次いで派遣し、こうした競争の中から太平洋は急速にその相貌を明らかにし始めた。

謎の未確認南方大陸はこれらの探検航海の結果、幻影であったことが判明し、太平洋は島々が散在する巨大な海洋であることが初めて確認されたのである。と同時に、太平洋上に浮かぶ主要島嶼群もほぼ全て発見され地図上に書き入れられていった（図1）。

探検隊にとって水平線の彼方に現われてくる島々はいずれも未知の領域であり、そこへ上陸するのはあたかも未知の惑星に着陸する宇宙船と同様の経験であった。そこに人は存在しているのか、いるとすればどのような者の

か。

探険競争時代、初めて太平洋の島タヒチに接近したサミュエル・ウォリス隊は、数百隻のカヌーが自船に向かって押し寄せてくるのを目にした。一方ウォリスの艦が近づいてくるのを目にした島民達はそれを漂う島だと思いこんだ。マストは島に生えている木だというわけである。ウォリス隊はカヌー船団の攻撃に対し、大砲を発砲させることで応じた。その中の一発はタヒチの「王」と「王妃」の足元に炸裂した。これは著しい効果を発揮し、島民は態度を一変させ歓待に転じた。ウォリス隊は水や食糧の補給を必要とし交易を望んでいたので、交易の意図を身振りで示し、島民も身振りで許諾の意を示した。こうして交流が始まり、イギリス人達は島に上陸しタヒチ島民は艦に乗船した。島民は艦の巨大な造り、西洋の様々な製品に目をみはったが、彼らが最も欲したものは意外にも帆船をつなぎ止めている釘であった⁽¹⁾。タヒチに限らず太平洋における歓待の法則は、主も客も互いに惜しみなく相手の欲するものを与えあうことである。「私の物はあなたの物、あなたの物は私の物」がその公準である。この法則に従えば、タヒチ人はイギリス人の欲する食糧や水や若い娘をふんだんに与える代わりに自らの欲する釘をいくらかも持って行って良いということになる。しかしこれはイギリス人の目には盗みと映った。しかも釘を手当たり次第抜き取られると艦は解体してしまうのである。イギリス人の論理ではあくまで「私の物は私の物、あなたの物はあなたの物」であり、イギリス人とタヒチ人は互いの物と物とを一定レートで交換すべきだった。例えば若い娘との性交一回に付き30ペニー分の釘といったようにである。武力で圧倒的に優越するイギリス人は自分たちの論理を押し通すことに成功したが、タヒチ人は、盗人であり、売春婦であり、攻撃的でもあれば愛想良くもあり、きわめて気前も良いといった混乱したイメージを残すこととなった。

ウォリスの直後にタヒチを訪れたブーゲンヴィルもまた島民の歓待攻めに遭い、タヒチには私有財産制が存在しないのだと錯覚することとなった(ブーゲンヴィル [1990], p. 218参照)。このブーゲンヴィルの錯覚は啓蒙主義

思想家のデイドロによって増幅され、以後西洋では、タヒチは文明の束縛と不平等の害悪を知らない無垢の自然状態の楽園であるという幻想が書齋派の知識人の間を風靡していくことになる。だが、無論こうした理想化は、当時のブルボン王朝下のアンシャン・レジームに対する、ひいては西洋近代文明一般に対する知識人の反感をタヒチの上に投影させた虚像にすぎない。さすがに実際の体験家であったブーゲンヴィル本人はその探検記の後の方で最初の印象を訂正してはいるが。

キャプテン・クックはフランス人達よりはるかに洞察力に富んでいた。クックは、タヒチやトンガなどそれまで自分達白人が訪れてきた太平洋の島々が楽園だとされてきたのは、自分達異邦人が相手の島々の日常を中断し、お祭り状態にしてしまったからであると鋭く見抜いたのである(マーシャル&ウィリアムズ [1989], p. 435参照)。クックはそうしたお祭り騒ぎの向うに、島々の現実を垣間見る能力を具えていた。たとえば首長と平民の間の支配・服従関係と不平等、陰謀と裏切り、人身御供や食人の風習といった楽園からは程遠い事実の数々である。こうした負の側面が増幅されると、今度は忌まわしい悪習が風靡する野蛮の土地という太平洋のイメージが形作られることとなる。

労することなく食物に満たされ、性的束縛も富の不平等や権力もない楽園のイメージと、戦いに明け暮れ人間を人身御供に捧げ、人肉を食らう獐猛な野蛮人のイメージは、一つのコインの表と裏のように分かち難く結びつきながら、以後19世紀、更には20世紀に至るまで執拗に西洋人の太平洋島嶼民のイメージを支配してゆくことになるのである。

第2節 太平洋交易の開幕と太平洋諸島における政治・社会変動

白人の到来は訪問をうけた南太平洋の島々に衝撃をもたらさずにはおこな

かった。キャプテン・クックは第2回航海の時すでに、かつてウォリスやブーゲンヴィルを歓待しその威厳と優美を讃えられたタヒチの「女王」の権威に翳りが見えていることを察知した。またキャプテン・クックの第3回航海の時発見されたハワイ島の「王」は、その時のクック隊の士官であったジョージ・バンクーバーが船長として訪ねた13年後にはこの世に存在しておらず、代わって甥のカメハメハがハワイ島全体の統一へと乗り出していた。またトンガ諸島においても、主として儀礼的・象徴的なものながら全土をその傘下に治めていた神聖王トゥイ・トンガの下での安定は揺らぎ始め、1797年には大内乱時代に突入する。これら全ての政治的変動には、西洋人との交易開始による新奇な財の流入、とりわけマスケット銃の導入が大きく与っていた。

キャプテン・クックの第3回航海が終了した1779年には太平洋の主たる島々はほぼ全て発見され、その結果を記した地図が1784年には出版され⁽²⁾、太平洋は西洋人にとってもはや未知の海ではなくなりつつあった (Snow & Waine [1979], pp. 61-62参照)。そして、こうした探険航海によって情報開拓をうけた太平洋に、より実利的目的を持った船が現われ始めた。太平洋の島々に新たな産品を求めて乗り出してきた商船、太平洋の新たな漁場としての可能性を追求する捕鯨船、そしてキャプテン・クックによって領有宣言がなされたオーストラリア大陸を流刑植民地とするため、徒刑囚を送りこんでくるイギリスの囚人運搬船などである。

タヒチにもキャプテン・クックの最後の航海から後約9年間は西洋船の船影を見なかったが、1788年からの20年間には23隻の船が寄港している。その内訳は、捕鯨船、アメリカの太平洋岸から中国へ毛皮を輸出する毛皮交易船、マカオから出航したイギリス東インド会社船、チリのヴァルパライソからの商船、オーストラリア流刑植民地から送り出されてきた商船などである (Newbury [1980], pp. 72-76/Maude [1970], 第5章参照)。すなわち、18世紀末、太平洋は探険の海から交易の海へと変貌を遂げていったのである。

1786年に始まり、18世紀の最後の10年間、太平洋交易の主役として交易の

海としての太平洋を拓いていったのは、北米太平洋岸から中国に向けての毛皮交易船であった (Kuykendall & Day [1948], p. 43参照)。毛皮交易船は広大な太平洋を横切るに際し、中間点に位置するハワイを食料や木材の補給地とした。こうしてハワイが他に先駆けて西洋の経済体系に巻き込まれる太平洋最初の島となっていく。こうした船が水や食料、木材、更には現地の女との交わりの代価に落としていく西洋産の交易品は膨大なものとなった。ことに権力闘争に乗り出した首長達が欲したのはマスケット銃を始めとする西洋製の武器であった。当初、交易品の主役であった手斧、ナイフといった鉄製品は首長達の希望商品リストから急速に脱落し、銃・火薬・弾丸・大砲などが洪水のように流れこんでくる。毛皮交易開始3年後の1789年には、ハワイ統一へ向け邁進していたカメハメハ一世は、すでに2門の大砲、2門の旋回砲、24~30丁のマスケット銃を保有していたと言われ、1804年には600丁のマスケット、14門の大砲、40門の旋回砲、6門の小銃砲へと増加している (Sahlins [1992], p. 43参照)。

ここで注意すべきは、16~18世紀に東洋へ乗り出して行った西洋船と18世紀末に太平洋に現われた西洋船の性格の違いである。16~18世紀に東洋へやってきた西洋船は、すでに述べたように国家権力を背景にして王室造営船や東インド会社船のように本国から交易独占権と半国家的機能を与えられていたのに対し、18世紀末に太平洋に到来した商船の多くは民間資本の経営によるもので国家の庇護を欠いていた。時代の潮流は重商主義から自由主義貿易へと移りつつあったのである。

こうした本国政府の軍勢力を背景としない民間商船は、寄港地での安全と交易の成就を、港灣を支配する現地の首長の好意と保護に委ねざるを得なかった。その対価として、寄港地を支配する首長にその欲する武器・弾薬、そして時には戦闘員をふんだんに供給したのである。このことは武器や弾薬が西洋船の寄港地を支配している首長達に圧倒的に独占されることを意味する。ハワイではホノルルを擁するマウイ島の大首長カヘキリが、カヘキリの死後はホノルルを奪取したカメハメハが急速に勢力を拡大し、タヒチではや

はり良港マタバイ湾一帯の所有者であったボマレ家が、ウォリスやブーゲンヴィル寄港時には全島で最も権威のあったアオマ家を凌ぐ勢威を張り始めた。こうして、太平洋の島々、とりわけ白人が頻繁に訪れたポリネシアの島々における、18世紀末から始まる政治・軍事的変動は、西洋からの商船の寄港によって引き金をひかれ、更にはその全行程を通じ常に深甚なる影響を加えられ続けたのである。

西洋諸国の商船が太平洋を頻繁に横断するようになるにつれ、太平洋の島々は単なる飲食料の補給や船員の性欲の発散のための寄港地としてだけではなく、それ自体が目的地として商船を惹きつけるようになっていった。そうした西洋商船によって、商品としてまず目をつけられたのが白檀であった。白檀は北米西海岸から中国への毛皮交易船が寄港地として停泊したハワイにおいて18世紀末に見つかった。白檀は中国において香料として高く評価される商品である。太平洋の島々が白檀を産することを知った西洋諸国の商船や捕鯨船は良質の白檀を求めて太平洋を徘徊するようになった。

最初に白檀ブームで沸いたのがフィジー群島である。フィジーはその住民の西洋人への敵対性のため、それまで西洋船の訪れることの稀な群島であったが、1804年、フィジーの東方300キロに位置するトンガでフィジーに白檀の産することを聞き知ったオーストラリア流刑植民地の商船がこのニュースをもたらすと、瞬く間にフィジーの白檀ブームに火がつき、遠くカルカッタの東インド会社やアメリカ東海岸ニューイングランドからの商船までが押し寄せることとなった (Derrick [1946], pp. 39-41)。平均で600%と言われる利益率の高さに釣られてのことである。この白檀ブームはフィジーの白檀がほぼ切り尽くされるまで続き、1813年までに数千トンの白檀が切り尽くされると、ブームはハワイへと移り、1828年にやはりハワイの白檀が切り尽くされるまでラッシュは続いた。

またタヒチでは、オーストラリア流刑植民地の食料として19世紀初頭には植民地の主要輸入品となった塩漬豚肉を、イギリス本国から輸入するよりはるかに安価な輸入源として、1801~26年の間に約140万kgの豚肉が送り出さ

れたという (Newbury [1980], p. 9)。仮に、ブター頭から7 kgの肉がとれるとして、26年間で20万頭近い豚が屠られたことになる。人口約一万のタヒチにおいてはこれは極めて大きな数字である。タヒチのオーストラリアへの豚肉輸出は住民の蛋白摂取を犠牲にして続けられたわけである。対価はもちろん銃器や武器であった。当初、オーストラリア商船はピストルー丁で5頭分の豚肉を手に入れたという。交易が進むにつれ、交易レートは現地側により有利になっていっただろうが、このレートが続いたとしても二十数年間に万のオーダーの銃器がタヒチに流れ込んだことは間違いない。

ブームとなる産品が見つかった所では、このように現地社会の規模に不均衡なほどの量の西洋商品が流入したのである。つまり、単一産品の洪水的輸出は、逆に現地社会に西洋商品の洪水的流入をもたらしたのである。しかもこうした西洋商品のレパトリーはきわめて偏ったものであった。まず、斧、ナイフ、のみなどの鉄器類、マスケット銃やピストル、大砲などの銃砲類、そしてアルコール飲料、とりわけ安くて酒精分の強いラム酒やジンなどである。斧やのみなどの鉄器類は別として、銃砲類やアルコール類の洪水的流入は現地社会に破壊的影響を及ぼさずにはおかない。銃砲の流入は島々の戦争の性格を一変させた。弓矢での戦闘では死者一、二名で終結したものが、鉄砲の導入で戦場は大量殺戮現場と化した。また勝敗がより明確に、より劇的に決着し、敗けた側の村々は焼き討ちにされ、その住民達は根こそぎ殺されるか追放されるという事態になった (Derrick [1946], 第4章)。一方で、このことがそれまでの小さな地域に割拠する首長達の勢力均衡を崩壊させ、より大きな版図を持った勢力の出現を促すことにもなり、島々の統合への傾向を促進することともなった。ハワイやタヒチやトンガにおける統一王国はこのような厳しい殺戮戦の上に成立したものであり、成立当初の王国はまず何よりも武力に基盤を置く軍事政権であった。

またアルコールの洪水のような流入はまず首長層に浸透し、1792年にバンクーバーがタヒチを訪れた時にはすでに数人の首長が酒浸りの生活を送っていた (Newbury [1980], p. 7)。ウォリスが1767年に初めてタヒチに到来した

時は酒を知らず、勧められた酒を断って水を所望したタヒチ人が、一度酒の味を覚えるとその耽溺に歯止めをかける術を知らなかったのである。しかも流れ込んだ酒はラムやジンといった船乗りの飲むきわめて酒精分の強い安酒であった。タヒチのみならず、フィジーでもハワイでも、望む物産を手に入れるための代価として商船の船長達は、土地の首長達に銃砲とアルコールをふんだんに供給した。その結果、支配層の間では飲酒は常態化し、タヒチでもハワイでも、飲酒に沈湎しアルコール中毒症となった王が相次いだのである。

ハワイやタヒチでは王国統一後、飲酒は平民層にも広がり、タヒチでは1891年に「島内で造られたラム酒が九万リットル」、輸入ラム酒が2.2万リットル以上、その他輸入ブドウ酒15万リットル、アプサン酒1.9万リットル、コニャック1.5万リットルにも及ぶほどになっていた（ダニエルソン [1984], p. 89）。1000人近い外国人人口を考慮したとしても人口1万弱のタヒチでこの酒量は驚異的な数字である。しかもそれ以外にもオレンジの実から地酒が造られる季節となると、タヒチ人達は「夜を日に継いで酔い痴れその場に寝込み、起きてはまた底抜け騒ぎの大饗宴」（同上, p. 90）に興じるという有様であった。島のように巨大な船が水平線の彼方から持ち来たったこのアルコールという異界からの贈り物は、太平洋のいたる所でその住民達の心をとらえ、単調でいてしかも過酷な現実から、一時的にせよ桃源郷へ逃避させてくれる強烈な力を備えていたのである。

それでは白人到来後の太平洋諸島民を襲った苛酷な現実とはどのようなものであったのだろうか。

一つは本章でも触れた銃砲の導入による戦争の大量殺戮化と焦土戦術によるものであるが、今一つは白人がもたらした疫病の蔓延であった。太平洋によってユーラシア大陸から遠く切り離されていたハワイやタヒチ、トンガといったポリネシアの島々には赤痢、コレラ、インフルエンザといった流行性の疫病がかつて上陸したことがなく、島民達に西洋船の船員達ももたらした病原菌やウィルスが伝染した時、その惨禍は恐るべきものとなった。

18世紀の最後の30年間にタヒチの人口は15万から1万5千に減少したという(同上, p. 70)(別の説によれば3.5万から1万への減少)。一家全滅はもとより一村全滅といった状況も稀ではない状態が続いたのである。人々は為す術もなく、家族や隣人が倒れ、自らも未知の世界からもたらされた異様な病の手にかかって死ぬのを待つだけ、という状況におかれたのだった。

同様の状況はポリネシアのいたるところで展開された。たとえばニュージーランドでは19世紀に入ってからのはしかの大流行のため300人の村で生存者2名という例が記されている(Elsmore [1985], p. 39)。またハワイでも1849年の疫病の流行では約1万の死者(当時のハワイ人人口は約10万人)を出し、1853年から54年にかけての天然痘では2485人が死んでいる(Blackman [1977], p. 221)。

水平線の彼方から巨大な船で訪れてきた異人達のもたらすこの恐るべき疫病に対し、ポリネシア人達がどのように考え、どのように振る舞ったのかを語る記録は少ない。しかしこのような大量死が島の住民達に、新来の死病に無力な伝統医療に対する、更にはそれと結びついた伝統宗教に対する不信へと導いていったことは十分に考えられる。ニュージーランドのマオリ族は伝統的に行っていた農耕や伐採の時の儀式を次第に執り行わなくなっていった(Elsmore [1985], p. 44)。後に伝統的宗教を捨てキリスト教に改宗していく下地はこうした疫病の蔓延の中にも培われていたのである。

第3節 ビーチ・コーマーの出現

太平洋の島々で人口減少と文化的崩壊が進んでいく一方で、太平洋へ進出してくる西洋船はますます増加していった。

19世紀前半までの西洋商船の太平洋における交易は異文化間の価値落差を利用して巨利を博することを狙ったもので、典型的な遠隔地交易の一例であった。例えばラム酒のような安酒や中古の銃器などと引き換えに白檀を手

に入れ中国市場で高く売る、といったようにである。

だが問題は、白檀なら白檀を誰からどうやって手に入れるかである。白人到来前すでに高度の商業経済を発達させていたアジア市場とは異なり、太平洋の島々には貨幣も市場も商人も存在してはいなかった。こうした土地では、アジアのようにすでに存在している市場で活動している商人から買い集めるといったわけにはいかないのである。

交易商が商船を停泊させている寄港地まで、必要な量の白檀を集積して来なければならぬが、これができるのは地元の労働力を調達でき白檀を自由に処分できる地元の権力者だけである。

だが問題はそこでも発生する。西洋人の交易商は現地の言葉を知らないし、逆に現地の権力者は西洋の言葉がわからない。いつまでに白檀をどのような形でどれだけの量、寄港地まで持ってくれば、どれだけの支払いをするかについての交渉はかなり突っ込んだ言葉のやりとりを必要とする。こうした交渉はもはや身振り手振りでのコミュニケーションの限界をはるかに越えたところで初めて可能となる。そのため両者を仲介する通訳者が必要となる。そうした役割を果たすことになるのがビーチコーマー（浜辺の寄せ波、転じて漂着者）と呼ばれる白人達であった。太平洋に多数の商船や捕鯨船が回航するようになると、それに伴ってそうした商船が寄港地に着いた時、脱走する船員や逆に不服従や怠慢の故をもって船長によって置き去りにされる船員が現われ始めた。元来、商船や捕鯨船においては下級の水夫の生活条件はきわめて厳しく、とりわけ船長は船上での絶対権力者なので、船長が苛酷な性格の者であれば船中の暮らしは容易に耐えがたいものとなった。有名なパウンティ号の反乱は、このような度を過ぎた苛酷な船長に対し、船員が反乱を起し、船長派を放逐し自分達はタヒチに残留したものであった。

このように、船から脱走したり置き去りにされ、太平洋のあちこちに住み着くようになった者達を、ビーチコーマーと呼び慣わすようになったのである。

こうしたビーチコーマー達は現地の権力者のもとに保護され、寄留するこ

とが多かった。現地権力者も、水平線の外から現われてきた、これまで見たことも聞いたこともない異質の存在である白人達と何とか安全な交わりを持ち、できることなら自らの勢威の拡張のために利用したいと考えたのである。そうした現地権力者にとってビーチコーマーは、白人世界への疑問を解き、白人世界との接触の手がかりとなる貴重な存在なのであった。またビーチコーマー達は島民達にとって、驚嘆の的であり脅威の源でもあった銃器、雷鳴のように轟き瞬時にして人の命を奪う魔法の武器を扱う術を教えてくれる教師でもあった。こうしてビーチコーマーを客人として、更には臣下として持つことは、現地権力者にとって有益でもあれば威信の源ともなった。それは、彼が未知の巨大な異世界である白人世界とすでに関係を持ち、それを背後に控えている証でもあったからである。

ビーチコーマーは生きていくためには現地社会の好意を得なければならず、そのためには現地の言葉を覚え、現地の慣習に従い、現地の妻を貰い、現地社会の一員となる必要があった。中には島の習慣に従って全身に入れ墨を施す者もあった (Snow & Waine [1979], pp. 92-93, 96)。逆にこうして現地権力者に保護され、現地社会に融けこむことさえできたならば、彼らは貴重な客人として珍重され、貴人の妻をもらいうけ、首長並みの地位を受けることができた。西洋社会では最下層民として苛酷な生活を強いられざるを得なかったビーチコーマーにとって、異郷での安楽な暮らしと貴人扱いは本国では想像をすることもできない楽園生活と思われたことであろう。

やがて、ビーチコーマー達は、太平洋の島々を来訪する西洋船が増加するにつれ、そうした船が集まってくる寄港地に集住するようになっていった。たとえば、ハワイならホノルル、タヒチならパペーテ、フィジーならレヴカといった港である。

こうした寄港地の中から、太平洋の島々がそれまで経験したことのない全く新たな居住空間が生まれてくるのである。

第4節 寄港地の誕生と島嶼王国

ホノルル、パペーテ、レヅカ、アピアといった寄港地こそが、西洋商船の側から言えば、太平洋の島々の門戸であり、島の側から見れば西洋の異人達への窓口であった。つまりは西洋近代文明と太平洋島嶼文化が出会う主舞台だったのである。

いずれの寄港地も、まず一塊りの白人の住まう現地風の茅ぶき屋根の小屋の集まりから出発した。

寄港地に居住を始めたビーチコーマー達は寄港する西洋船のための水先案内や通訳といった仕事を始め、次第に現地権力者への完全な依存から脱し、独立性を高めていった。中には定期的に島を訪れる商船の代理人となったり、自ら在住の交易商となる者も現われてきた。こうして、他に誰も白人のいない島で一人暮らすビーチコーマーの時代は終わり、集住化した白人居留地の時代となるのである。

西洋の商船や捕鯨船は交易の便の良い寄港地へと集中する。ということは、島からの輸出品や補給財とひきかえに、島民達にとって垂涎の的である西洋の産品がそこに集中するということでもある。当然、現地権力者がこうした西洋の貴重品の集中する寄港地に無関心であり得るはずもなかった。

統一を達成したばかりのハワイのカメハメハ一世やタヒチのポマレ二世は寄港地における交易を独占しようとする。

たとえば、1810年以降始まったハワイの白檀交易においては、カメハメハ一世がハワイ諸島全土の白檀の所有と交換を王室の独占的な特権とし、白檀交易をその一手専売とした (Sahlins [1992], p. 58)。また、タヒチのブタ肉交易においても、ポマレ二世がその取引を独占しようとしたが、すでにブタ肉集荷のネットワークは寄港地の白人交易代理人と各地の首長の間に形作られており、ポマレの意図は挫折を見た (Newbury [1980], p. 11)。ポマレ二世は、その後、宣教師がオーストラリアとの連絡のため造船しようとしていた帆船

に用材を提供し、自らの代理人を帆船の船長に任命して、王直轄のブタ肉交易に乗り出そうとした。更には、宣教団が始めた砂糖キビ・プランテーションと精糖事業にも介入し、それを王室独占事業としようとした(同上, pp. 53-57)。

だが、これら国土統一を果たしたばかりの王達による交易独占の試みは、失敗に終るかさもなければ短命なものにとどまった。統一を達成したとはいえ、王達の支配力は王への直接的反抗を抑え得る程度にすぎず、積極的に人民を駆って事業を推進しうるだけの組織力はなかったからである。

こうした中で、ただ一例、長期にわたる王室による交易統制に成功した例がある。それはギルバート諸島中部のアベママ島の支配者、テン・バイテケ(Tem Baiteke)、テン・ビノカ(Tem Binoka)父子によるものである。

バイテケはアベママ沖の小島を寄港地として開放し、主要島へは一切、白人商人の立ち入りを禁じた。そして、寄港地に入った商船はバイテケの部下の審問を受け、バイテケへの贈り物を要求される。その後、小島で待機する商人の所に、バイテケの交易長官の厳重な監督の下、島民達がココナツ油を売りにやってくる。こうして厳しい管理の中で、ほとんど沈黙交易にも等しい、白人と島民の接触を最小限に押さえた交易が行なわれたのである。そしてこうした厳しい交易管理は息子のビノカにも引き継がれ、ビノカはココナツ油に代わって白人商人の主要買付け品となったコブラの交易独占を行った(Maude [1970], pp. 207-208, 217-218)。こうしてアベママ島における王による交易統制は、19世紀太平洋上に成立した王国の中では最も徹底し、最も持続的成功を、半世紀にわたって取めることができたのである。

テン・バイテケはこうした交易統制を始めるにあたって、まず領土に住み着いていた34人の外国人ビーチコーマー全員を殺害することから始めた(同上, p. 206)。これによってバイテケは王による交易の独占管理を可能としたのである。実際、寄港地への集住を始めたビーチコーマー達は、個々人で権力者の下に庇護されていた頃と違って、王国から半ば独立した存在となり、王国の統御の外へ逸脱し、時には王国と対立することすらあった。寄港地へ

の集住を始めた白人達は成立したばかりの統一国家にとって攪乱要因、破壊要因としての側面を現わし始めたのである。王達の交易独占の試みを掘り崩し挫折させたのもその一つの現れである。西洋世界における経済の仕組みへの理解とそれへのアクセスの能力において、王達には白人居留地に対する勝目はなかったのである。

こうした寄港地における白人居留地の成立は、当然ながら現地権力者の疑心と警戒を招くことになった。

ハワイのカメハメハ一世は土地を持たない外国人の即時立ち退きを命令し、息子のリホリホは刺客をホノルルに送り、自らに従わない外国人を追い出しすらしめた (Ralston [1970], p. 84)。またタヒチでも、1820年代末から首長達の外人居留地への敵意が高まった (Moerenhout [1993], p. 155)。ただ、アベママのような辺境の小島とは異なり、ハワイやタヒチのような太平洋航路の主要中継地では、居留外人の全員殺害や完全追放は不可能であった。もはや王や首長達自身、商船や在留外人による近代西洋経済への仲介なしにやっていけなくなっていたし、アベママのような手荒な事を敢えて行えば、西洋列強が黙ってはおかなかったであろう。イギリス、フランス、アメリカ、ロシアなどの軍艦はすでに太平洋において定常的に遊弋を始めていたのである。

成立したばかりの統一王国は誕生の瞬間から列強の圧力に身をさらされていることを自覚せざるを得なかった。すでに1794年には、ハワイ統一戦争のただ中であつたカメハメハ一世がイギリスの保護下に入ることを申し出ている (中嶋 [1993], pp. 24-25)。事実、1810年代にはロシアによるハワイの植民地化の動きが表面化するなど、カメハメハがイギリスの保護下に入ることによってハワイの植民地化を防ごうとしたのもあながち杞憂とは言えなかったのである。

同時に、太平洋における王国の統一化は逆にこうした列強の圧力を利用して推進された側面もあつた。カメハメハ一世がイギリス海軍のジョージ・バンクーバーの助言を受けて王国統一を進めていったのもその一例であるが、タヒチでもポマレ二世の統一事業はやはりオーストラリア流刑植民地のキン

グ総督の支持を背にすることにより促進されていった。

このように、太平洋の島嶼における王国統一は、統一者が西洋近代世界からの風を巧みに利用することにより促進されたし、一旦統一が完了すると今度はそうした風圧の中で統一国家を操船していく技量を必要とされたのである。

太平洋における統一王国の支配者達は、絶えざる外圧と統一間もない未だ脆弱な国内体制の間で微妙な均衡を取りながら国家経営の舵を取ることを要求された。また統一者にはそれを十分にこなすだけの力量があったのである。しかし余りにも多くが統一者の個人的力量に委ねられていた。そうした能力は、統一事業を受継いだ後継者達には必ずしも期待できる質のものではなかったのである。

第5節 島嶼王国の政治構造

島によって様々に変異するとはいえ白人文明の到来後、統一王国を形作る動きを見せた所では、白人到来以前すでにかかなりの程度に政治的統合が進んでいた。ハワイ、タヒチ、トンガ、フィジーなどでは階層社会が既に成立し、平民、首長、高位首長（トンガの場合はその上に神聖王トゥイ・トンガが位置する）といった基本的階層構造を共有していた。

社会の基本的単位は村落であり、村落は親族集団によって構成されていた。通常こうした村落の頂点に立つのが首長であり、首長の下で島々の日常生活の大半は組織されていた。このような首長の下に組織された村落社会を本章では在地社会と呼んでおこう。

こうした在地社会の上に、複数の村々と首長達を傘下に収めるのが高位首長たちである。高位首長は傘下の首長達の封土を保障する代わりに傘下の村々から貢納と徭役を受ける権利を有した。だが、高位首長の傘下の村々に対する支配は間接的なものであり、その統合力は緩く変動を蒙り易いもので

あった。ハワイ諸島ではこうした高位首長の上に島ごとの王が、トンガでは更にトンガ諸島全体を象徴的に代表する神聖王が位置していたが、タヒチやフィジーでは多数の高位首長が割拠・拮抗していた。

統一王国をもたらした王達は、こうした伝統的政治構造をもとに、それを再編・拡張する役割を果たしたとあって良いであろう。その際、王達が最も直接的に手をつけたのが高位首長層である。ハワイのカメハメハ一世は一種の宮廷社会をつくり高位首長達を自らの周りに住ませた。高位首長達を在地社会から切り離し、反乱の基盤を消滅させるためである。またトンガでも、統一を達成したトゥポウ一世は高位首長を貴族に列し、首府ヌクアロファに住ませ、立憲君主体制の枠組みの中に組み込もうとした。またタヒチのポマレ二世も同様に高位首長を貴族化し、こうした貴族と下位首長、それに宣教師を集めて一種の議会を開催した (Moerenhout [1993], p. 525)。

こうして統一が成った所ではおしなべて、かつての高位首長層は在地社会から離れて貴族化していき、王を中心とした宮廷社会を形作るようになっていった。

それとともに、貴族層の生活様式は急速に西洋化を始めていく。生活の西洋化を率先垂範したのは王達自身である。彼らは洋服に身を包み、身の回りを西洋製や中国製の家具で満たした。カメハメハ一世は1812年に中国から椅子やランプ、テーブル、花火、ピロード、サテン、絹、それに唐傘、絹の帽子などを輸入しているし (Sahlins [1992], p. 60)、ポマレ二世は文字を覚えることに熱心で、自らタヒチ語辞典編纂事業を宣言し、英語の本や地図を収集し、幾何学にまで手を伸ばそうとした (Newbury [1980], p. 58)。これはポマレが無文字社会で成人したことを考えると驚くべき異文化吸収意欲である。またトンガのトゥポウ一世は、自身オーストラリアを訪問し、身をもって西洋社会を経験したが、こうした王達の西洋化への努力は、西洋文明の巨大な力と富の秘密を我が物とし、自らの統治する社会を富国強兵化する意図に発していたものと思われる。

そして、こうした王達の西洋化への努力は貴族層に急速に模倣されてゆく。

ハワイの高位首長の情熱は、かつての軍事的優劣を競い合う戦いから西洋や中国の豪華で珍奇な富の誇示の競争へと移っていった (Sahlins [1992], p. 64)。白人商人達は衣服、台所用品から四輪馬車、ビリヤードテーブル、帆船にいたるありとあらゆる商品売り込み、貴族達はそうした新奇な品々を見せられるとすぐに購入し、その購入欲は尽きることを知らなかったと言われている (同上, p. 58)。

また貴族層は有力商人や寄港する軍艦の艦長達との交わりのなかから西洋風のテーブルマナーを学び、貴族らしい物腰を身につけ、更には西洋のスポーツに耽る者まで現れた (Ralston [1970], p. 91)。

西洋の富に囲まれ、西洋的生活様式を模倣し、西洋人と交際を深めていく貴族層は、未だに圧倒的に旧来の土着的生活を送る平民層との間の文化的乖離を急速に深めていったのである。

こうして、宮廷社会を作り、かつての同輩でもあれば競争者でもあった高位首長達をその中に取り込むことによって、彼らを在地社会から切り離すという王達の目論見は見事に成功した。もはや貴族化した高位首長達の間に、王の地位に挑戦し、王から独立したり、反乱を起こして王位を奪おうとする者は現れないであろう。彼らの関心は、軍事的手段をもって政治的権力を獲得することから、王国の枠組みの中でどのように実権を握り利権を手にするかに移っていくのである。そしてこうした利権は現地の貴族層にとっても、西洋人との間の価値落差を利用した異文化間交易の中にふんだんに含まれていたのである。

王達の交易独占の試みを阻んだのはこうした貴族層の利害と白人商人の利害の一致であった。そして統一を果した王達が死に、その後継者が立てられると、王の実権は急速に空洞化していき、王国の実態は貴族層による寡頭政治体制へと移ってゆく。こうして交易の利権は大ぴらに貴族層の手中に明け渡されることとなった。ハワイではカメハメハ一世の死後、白檀取引の6割は貴族層の手中に入り、王の交易支配権は確実に侵食されていった (Sahlins [1992], p. 59)。

こうして、統一君主によってひとたび実権ある地位となった王位は、彼ら統一者の死によって再び象徴的、儀礼的地位へと棚上げされていったのである。が、同時に、統一者亡き後、利権を握った貴族層も在地社会から遊離し、在地社会への統制力を失い始めていた。彼らは以後在地社会と結びつくよりも白人宣教師や商人と結びつく傾きをみせてゆく。その結果、社会を束ねる支配関係は緩みはじめ、外見上の統一とは裏腹に、島嶼社会の内部における解体はひそかに進行していったのである。

第6節 キリスト教と宣教団

太平洋におけるキリスト教の布教は、まず、王国を形成した、または形成しつつある島嶼において始まった。

その先頭を切ったのは、1797年、イギリスでカルヴァン派新教徒によって結成されたロンドン伝道協会がタヒチとトンガにおくった宣教団である。イギリスは18世紀中葉、ジョン・ウェズレーを指導者とするメソジストによって火をつけられた熱狂的なキリスト教復興運動を経験し、その余勢を駆って18世紀末に本格的海外宣教が始まるのである。

太平洋に乗り出していった宣教団はイギリスからはロンドン伝道協会とメソジスト教会、アメリカからはアメリカ海外伝道評議会であり、ロンドン伝道協会がタヒチとサモアを、メソジストがトンガとフィジーを、アメリカ海外伝道評議会がハワイをその勢力下に収めていった。

いずれの宣教団も、布教の迅速な達成のため、まず現地権力者を改宗させ、自らの宗派を国教化して、島嶼全体の住民を一気にキリスト教化するという戦略をとった。

1797年タヒチに到着したロンドン伝道協会の宣教団は早くからポマレー一家と結びつき、ポマレのタヒチ統一事業を側面から支持することによって、ついに1815年、ポマレ二世の改宗に成功し、タヒチを始めとするソサエティー

諸島のキリスト教化を進めていった。

またカメハメハ一世の死後、ハワイにやってきたアメリカ海外伝道評議会
は、カメハメハ亡き後実権を握ったその未亡人カアフマヌとその一族である
ケエアウモク氏をキリスト教化することによって布教に乗り出した (Sahlins
[1992], pp. 67-73)。

更にトンガにおいては1822年にやってきたメソジスト宣教師団が、激しい戦
国状態にあったトンガの諸侯の中からトゥイ・カノクポル家を未来の統一者
と見抜き、トゥイ・カノクポル家の有力者の改宗を進めていった (Lātūkefu
[1974], pp. 22-24, 61-67)。

このように太平洋に進出していった宣教師団はまず政治的支配層と結びつき、
その統一事業に乗っかる形で自宗派の国教化を図ったのである。

一方、島々の支配者達も宣教師との結合を欲し、また必要とした。一つに
は圧倒的な力と富を誇る西洋近代文明の秘密を我が物とするため、また一つ
には宣教師を西洋列強との仲介者、通訳者として自らの勢力拡大に利用する
ため、また西洋列強に伍して統一と独立を守るための政体を作り上げるため
であった。

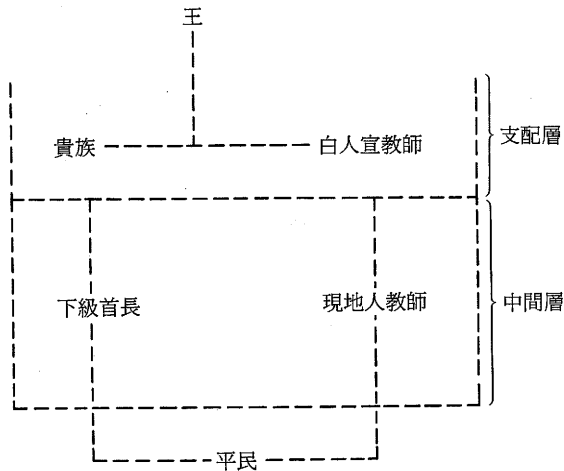
実際、島々の支配層が外国から独立国家として認めてもらうための体制を
作るに際し、最も貢献したのが各宣教師団であった。

支配者達の側近、ないし助言者となった宣教師達は、支配者の要請に応え、
半ば西洋的立憲君主制、半ば旧約におけるモーゼの律法専制国家といった態
の世俗法と宗教規範の入り混じった法典を作成していった。

宣教師達のターゲットとなったのは、戦争の廃絶、食人慣習や人身御供の
廃止、一夫多妻の撤廃などの他に、偶像崇拜の禁止、裸体や入れ墨の禁止、
歌や踊りの禁圧といった、厳格で偏狭なプロテスタントにとっては我慢でき
ない現地慣習であった。とりわけ、エロチシズムを想起させる全ての慣習は
容赦なく弾圧された。

各教派の手足となって現場で働いたのが、宣教師から教育を受けた現地人
教師達である。宣教師団と手を結んだ貴族達はその支配領域のいたる所に教会

図2 上からのキリスト教化による王国の階層再編



(出所) 筆者作成。

や学校を建て、宣教師配下の現地人教師を配して、支配下の平民に礼拝や学習を厳罰をもって義務づけた。こうして貴族層は教会や学校という手段を用いて新たな在地社会への統制の体制を作り上げていったのである。

その結果、太平洋の王国の最上層は王、貴族層、白人宣教師の三つの勢力で構成されるようになった。

太平洋の島々にやってきた白人宣教師を駆り立てた情熱の源は、その島々にはびこる「邪教」を駆逐一掃して、資本主義本国ではかなえられるはずもない、聖書に則った「神の国」を創り上げることであった。支配層に取り入り、自教派を国教化して島民あげて改宗させることにより、一国をまるごと一つの巨大な教会にしておもうとしたのである。したがってそこを支配する法は単なる近代的、世俗的な法ではなく、モーゼが古代イスラエル人を縛り上げたような宗教的戒律でなければならなかった。

しかし、このような神権政治を維持するためには、「神の国」を外の世界か

ら完全隔離する必要があった。事実、こうした隔離に成功したクック諸島やガンビア諸島では全島民が聖職者のように厳格で繁瑣な戒律と性的に禁欲的な清教徒的規範の下で生活を続けていった (Snow & Waine [1979], pp. 131-132)。だが太平洋交易において何らかの位置を与えられ、商船や捕鯨船が頻繁に寄港してくる島々では、こうした神権的支配は破れざるを得ない運命にあった。寄港地の世俗的白人居留者にとっては、宣教師達の行おうとしている神権政治は時代錯誤の狂信以外のなにものでもなかったし、それ以上に古代イスラエルで書かれた聖書の文言通りの行動をとっていたのでは、19世紀資本主義世界の中で正常な交易や外交関係を営むことは不可能だったのである。事実、自宗派以外の宣教師の活動を許そうとしなかったロンドン伝道協会の宣教師は、そのカトリック宣教師に対する迫害を口実にされ、タヒチをフランスの保護領とされるという悲劇的失策を犯している (Haldane [1963], 第7章以降参照)。このように太平洋の島嶼を聖書の文言に則った「神の国」にしようとした宣教師達のユートピア的試みは太平洋の主要な島々では全て失敗に帰し、太平洋への西洋世界の進出が深まるにつれ、宣教師達は表舞台からの退場を余儀なくされていったのである。

代わりに登場してきたのが、島々の寄港地に定住して、島と西洋世界の交易に従事する白人在留商人達であった。

第7節 太平洋交易の拡大と寄港地社会の展開

太平洋の島々における西洋の商人達の活動はまず補給のための一時的寄港から始まり、次いで、島々に外部市場で売れる産品が見つかるると定期的巡航船が訪れるようになった。その時、こうした巡航する商船に産品を集荷・引渡しをするための仲介者として、島々のあちこちに散在していた寄留白人達が寄港地に集住するようになったことは既に述べた通りである。

更に交易活動が増大してくると、今度はその交易に従事するために、島々

に定住するべくやってくる専門の白人商人達が現われた。

こうした一握りの定住白人商人達の出現とともに、寄港地の、そして寄港地を擁する島々の歴史は新たな段階に入っていくのである。

これら白人在留商人達は、以前のビーチコーマー上がりの仲介者達とは違って、本国社会を捨てたり、本国社会から捨てられたはみ出し者達ではなく、本国社会のなかで一定の位置を獲得している市民達であった。それゆえ、彼らは、本国に対する帰属意識を持って、本国市民として太平洋の島々にやってきた。その結果、島々においては外国人としての意識、しかも優越した白人近代文明の一員としての外国人意識を保持していた。

そして、寄港地における白人達の国籍意識の増大を反映して、各寄港地の商人の中から本国政府によって領事に任命される者が現れてきた。領事は、本国政府の代理人として自国民の保護を図り、自国の島々における權益を守るために外交活動を委ねられた在留市民である。こうした領事達が太平洋を遊弋し、時折寄港地を訪れる自国軍艦を背景に展開したのが領事外交であり、軍艦艦長自らが乗り出した外交活動が砲艦外交である。

こうした領事外交・砲艦外交の開始は島々に近代的主権国家の体裁を整えることを強いずにはおかなかった。島々で白人に加えられた危害に対し、王はその加害者を罰し、被害者である白人に償いをせねばならず、白人商人に対して島民によってなされた債務の不履行は当事者に履行させるかさもなければ王国の責任で弁済しなければならなかった。こうした要求に応えるためにも、王達は西洋列強の市民達をも納得させるような法体系と司法制度を自国内に確立せねばならなかった。

とりわけ急務は、寄港地における法と秩序の確立であった。白人交易商は多くが寄港地に集中しており、白人と島嶼民のトラブルが生ずるのは専ら寄港地においてであったからである。逆に言えば寄港地の秩序さえ維持できれば西洋列強との摩擦は概ね解消できた。

だがその寄港地の状況が惨憺たるものだったのである。

おしなべて太平洋の寄港地は無秩序状態に覆われていた。港町には酒と女

がつきものである。長い航海を狭い甲板に閉じこめられ、粗末で単調な食事と船長の絶対権力の下、苛酷な労働と劣悪な生活環境に耐えてきた船乗り達にとって、寄港地でのうき晴らしが唯一の楽しみである。『白鯨』の著者によれば、しかもそうした「船乗りの特徴が、最も野放図な様相を呈するのは南太平洋の島でのこと」だというのである（メルヴィル [1982], p. 1）。

後にタヒチのフランス領事となるムーレンハウトが見た1830年代のパペーテは、長い航海の間耐えてきた窮乏と苦しみを強い酒を浴びることで癒そうとする船乗り達が、上陸とともに町に繰り出し、いつの間でも、どここの場所でも、あらゆる方で昼も夜も、男女に関わりなく、酔っ払った人々であふれていたというものである（Moerenhout [1993], p. 149）。またタヒチの女達は船が到着すると「昼夜を問わず船に上がっていき、夕方ごろには水夫達と一団をなして歩きまわったり、売春斡旋を務める父親や兄弟や夫の手引きでカヌーに水夫を引っ張りこむ」といった光景も見られた（同上, p. 149）。ホノルルでは捕鯨船の寄港が最高期に達した1840年代には一日に400件の性交渉が行われたと推測され（Sahlins [1992], p. 107）、こうした売春からの上がりは、ハワイ王国の歳入額を上回るものであったという（同上, p. 108）。

フィジーのレヴカでは白人人口が急増し始めた1870年代初頭、町の2軒に1軒は酒場であり、入港する船長は海に漂っているラム酒のビンをたどって行けば港にたどりつける、と言われるほど酒びたりであったという（Granville [1979], p. 115）。

こうした環境の中から、1850年代のアピアのように「人間性を辱める最も不道徳で自堕落な外国人の集まりで」「自らの行動をいかなる法にも服せしめず——原住民には彼らに強制する力もその意志もない——至る所、無政府状態、暴動、乱行が生命と財産を不安定なものとしている」と断じられる町が生まれてくるのである（Ralston [1970], p. 83）。

安く強い蒸留酒（ラム酒やジン）をおおってはけんか騒ぎに明け暮れるという光景は、チャールズ・ディケンズが『二都物語』や『オリヴァー・ツイスト』で描きだした世界だが、太平洋の寄港地はこうした本国の最底辺の

貧民窟の状況を増幅してみせたのである。

こうして、寄港地を擁する太平洋の島々は三つの側面から侵入する白人文明に直面することとなった。

一つは、太平洋を遊弋し、時折寄港地に停泊する軍艦や在住する領事に代表される西洋列強の国家としての圧力（政治・軍事）、一つは、支配層に取り入り、島の至る所に影響を及ぼし出した宣教団の活動力（宗教）、そして寄港地に屯し、そこを酒と女に明け暮れる荒涼とした歓楽街にしたてあげた白人住民や船乗り達の影響である（経済・風俗）。

この三つの勢力に対応して、島々をめぐる空間は三つに分かれた。一つは島々を水平線の彼方から取り巻く大洋、これは軍艦や列強政府の支配する世界である。そして島々の内陸空間。ここには宣教団が根を下し、在地社会を変容させつつある。そして最後に、島々と水平線の彼方としての大洋との接点としての寄港地である。

こうした白人文明の侵入を受けて、島々は、水平線の彼方の西洋列強に対しては立憲君主制政体の体裁を整えることにより、宣教団にはその活動と結びついて社会を再編することにより、寄港地にはそこに首府を置き、その交易活動から利益を得、またその無秩序状態には統制を加えることにより、対処しようとした。

だが現実には、立憲君主政体の体裁は、それを創案・運営するために白人顧問への依存を深めさせる結果となり、宣教団との結合はともすれば宣教団が現地支配層の上に立ちかねない本末転倒を生じ、寄港地への首府設営は王や貴族層を在地社会から浮き上がらせ享楽と放蕩の世界に引きずり込む誘因となった。

こうして、成立したばかりの、あるいは成立途上にあつた太平洋の島国は、水平線の彼方からやってきた白人文明の侵入に対抗する方途を見出し得ないまま、19世紀後半には新たな白人文明の波をかぶることになるのである。

第8節 太平洋島嶼における白人入植活動の開始

基本的に19世紀中頃までの太平洋における白人の経済活動は、海洋や島々に自生する動植物を捕獲・伐採し、遠隔地の市場まで運んで利益を得るといふ資源収奪型のものであった。タヒチのブタ肉交易、フィジーやハワイの白檀交易、フィジーやニューヘブリデスのなまこ交易、タヒチやギルバート諸島のコナツ油交易、更には太平洋各所における捕鯨漁など全て既存の資源を収奪・集荷して売り捌くことに終始していた。こうした経済活動においては、太平洋の島々は基本的に製品の集荷や飲食料などの補給のための一時寄港地の役割以上に出るものではなかった。それら経済活動の主たる活動空間は島の上にはなく、海の上にあったのである。そしてそこで活躍したのは、交易商自らが船長として船を操る交易船長達であった。常に水平線の彼方から現れ、去っていくこうした交易船・捕鯨船の姿を見て、ソロモン諸島民は白人のことを「巨大なカヌーで永遠に海上をさまよう放浪の人種なのだ」と思い込んだ程である (Bennet [1986], p. 23)。交易船や捕鯨船にとっては島々はあくまで一時停泊を行う場所であり、その背後に広がる内陸部は寄港地という舞台の単なる背景にすぎなかった。太平洋の島々は常に海からの視線で眺められていたのである。

それに対し、島を陸として捉えていたのが宣教師たちである。彼らの関心は海上にはなく、あくまでも陸地とその上に住む人間達にあった。本国から遠く離れ、宣教活動や日常生活のための物資の購入にも事欠く宣教師達が、経済的自立のため、陸地としての島々に注目したのはけだし当然の成り行きであった。

その彼らが最初に目を付けたのが砂糖キビであった。ロンドン伝道協会の宣教団は南太平洋の島々がカリブ海の西インド諸島と同様な気候条件にあることに注目して、1818年、西インド諸島から白人入植者をタヒチに招き入れる。ゆくゆくはタヒチの砂糖産業がオーストラリアにとっての西インド諸島

の役割を担うことを期待してのことである。しかし、この事業が白人による土地の奪取につながると見抜いたポマレ二世は異を唱え、太平洋ではじめてのプランテーションの試みは挫折した (Newbury [1980], pp. 56-57)。

本格的な砂糖キビ・プランテーションが拓かれるのはそれから17年後、ハワイにおいてである。今度はアメリカ東部から来布した貿易商社の手によるものであった。この試みは軌道に乗り、やがて1848年のアメリカによるメキシコからのカリフォルニア奪取とその直後のゴールドラッシュ以降、アメリカ市場との結びつきを深めながら一大産業へと成長を遂げてゆくのである (タカキ [1986], pp. 7-9)。

この後、太平洋における主要経済活動は海から陸へと移ってゆく。

1861年、南北戦争によるアメリカ南部の綿花供給が激減し、綿花価格が急騰すると、ゴールドラッシュが一段落して次の一攫千金の機会を求めているオーストラリアの白人達がフィジーで綿花栽培を始めようと流入してきた。この綿花ラッシュは、南北戦争が終わりアメリカ南部の綿花生産が回復するとともに終息してゆくが、入植者達は砂糖キビに切り換え、生き延びてゆく (Young [1970], pp. 150-151)。

また1810年代、タヒチの宣教団によって信者から教会への寄付組織として始まった補助協会は、王や首長を介してタヒチ島民からのココナツ油の寄付のネットワークを作り上げた (Newbury [1980], p. 50)。こうした宣教団によるココナツ油の寄付組織はトンガなどでも構築され、更に交易船長らにより模倣されることによって、ココナツ油交易は他の島々にも広まっていた。

ココナツをこうした集荷の対象から栽培の対象へと変えたのは、南米経由で太平洋に乗り出してきたドイツの商社ゴデフロイ親子会社であった。ゴデフロイ社はココナツの利用法をそれまでの油から乾燥果肉に変えることによって収量を一気に増大させることに成功した。それによってココナツ・プランテーションが規模の経済に見合う産業となったのである。

それ以来、砂糖キビとココナツは太平洋における二大プランテーション産品として今日に至っている。

いわば19世紀前半までの資源収奪型経済が、19世紀半ばを境に資源栽培型経済へと変貌を遂げてゆくのである。

それに対応して、島々は大洋上に浮かぶ寄港地としての存在から、入植のための土地を提供する陸地へと性格を変えていった。この事態は島々と白人の関係を根底から変えるものであった。それまでは宣教師だけが定着していた島の内部に、宣教師の数を遙かに上回る白人達が入り込んできたからである。しかも、宣教師達は住居のための小区画を必要としたのみであるのに対し、入植者達は農園を拓くための広大な土地を欲したのである。

こうして寄港地という海との接点に限定されていた白人の経済活動は、砂糖キビやココナツ栽培とともに、一挙に内陸全体へ面として広がっていった。

第9節 入植者の増大と白人社会の変容

新たに登場してきた入植者たちは、自らを、太平洋の島々に「文明の祝福」をもたらす使徒だという意識を持ってやってきた。こうした意識は、先行する白人のなかでは宣教師達の間に見られたものだが、宣教師の場合、その「文明」とはキリスト教とその倫理であったのに対し、入植者達の「文明」は19世紀西洋資本主義の「文明」であった。ハワイで最初に砂糖プランテーションを拓いたウィリアム・フーパーは自らの入植を「文明の進歩や産業の発展や国家の繁栄を拒む働きをするにちがいない……族長のための労働」という「悲惨な制度から原住民を開放する」(タカキ [1986], p. 11) という使命の遂行であると意義付けている。宣教師達が王や首長 (chief: フーパーの言葉を使えば「族長」) 達と結合して、在地の政治・社会構造は温存・利用しながら布教を進めていったのに対し、ここには在地社会の構造そのものを敵視し破壊しようという強固な意志が表明されている。実際、入植者が生き残るためには、少なくとも彼の拓いたプランテーションという小世界の中では、それまでの在地社会の人間関係や生活習慣とは全く異なった社会組織や労働

条件を貫徹させる必要があったのである。

ところがフーパーが見出したのは「族長達の邪魔と原住民の扱いにくさ」であった(同上, p. 10)。一方、ハワイの平民達にはフーパーが押しつけようとしていた「解放」は我慢のならない強制だったのである。自身の土地の上で、自身のリズムとテンポで生活を組み立てていけた伝統的労働のあり方から、一時間単位で行動を統制され、自己裁量の許されないプランテーションの生活への変化は牢獄に押し込められるのも同然であったろう(同上, p. 16)。ハワイ人労働者達は時間の主から時間の奴隷へと転落させられたのである。このような時間によって隅々まで労働を管理しようとする白人入植者に対して現地ハワイ人は怠業によって応じた。フーパーが見ていないところでは彼らはすぐさま労働を放棄したのである(同上, pp. 18-19)。

寄港地の在留白人商人達はこのような抵抗を経験する必要がなかった。彼らにとっては、商品さえ調達できたなら、その間にどのような労働がどのようなテンポで行われようと関知するところではなかったのである。しかも寄港地の白人商人達の扱った商品は白檀やナマコといった島々の特産品であり、商人達はそれら特産品を独占できる立場にあった。その結果、寄港地の商人達はそれを遠隔地の市場に運ぶだけで、買い取り価格の数倍から数十倍というもうけを手にすることができたのである。

一方、入植者達の栽培する砂糖や綿花やコブラ(ココナツの乾燥果肉、石鹼の原料となる)といった商品は世界のいたる所で生産され、いたる所で消費される世界商品であった。その結果、入植者達は常に厳しい価格競争にさらされ、その中で生き延びねばならなかった。そのためには生産効率は至上命令だったのである。

つまり、寄港地の商人にとっては、島々の価値の源泉はその他の世界とは異なった特異性にあったのに対し、入植者は島々を世界のどの地域とも同質な生産空間とすることによってしか生き残ってはゆけなかったのである。自らを西洋資本主義文明の一員であり更にはその太平洋における使徒とみなす彼らの意識を、先行する寄港地商人から分かつのは、こうした両者の存在性

格の違いに淵源する。入植者達は、太平洋の諸島民を自分達と同じ「文明人」、つまりは賃金労働者に仕立て上げることなしには生きてゆけなかったのである。

皮肉なことには、これら入植者達の多くが、本国で人に使われる労働者となるのがいやで、自分自身が主人でありうるチャンスを求めて太平洋の島々にやってきた者達だったことである。その彼らが太平洋の島々で自分が主人となるために、そこの住民を自分の労働者に仕立てあげようと血道を上げる様は、人をして資本家か労働者の二者択一へと振り分けずにはおかない資本主義の冷徹な論理の然らしむる所であった。そして自身が主人となるために太平洋の島々へ流れ込んできた入植者達が、自らの行為を正当化する支えとしたのが、適者生存と自然淘汰を柱とする社会ダーウィニズムであり、白色人種を支配人種であるとみなす人種的帝国主義であった。それによれば、白人が主人となり島民が労働者となるのは「明白な運命」だという結論に達する。こうした意識の中から、フィジーではクー・クラックス・クランを名乗る白人集団が現れるのである (Granville [1979], pp. 120-124)。

このように白人人口中に入植者が増えるにつれて、太平洋の白人社会の意識は大きく変化していった。

そしてこのような白人社会の意識変化は在留白人達の生活様式の変化と密接に関連しながら進行していった。例えば、ハワイでは最初の砂糖プランテーションが拓かれた翌年、1836年に初めての英字月刊紙『サンドイッチ諸島新聞』が発刊され、その後20年間に相次いで7つの新聞が発行されていった (Kuykendall & Day [1948], p. 84)。こうした在留白人の知的水準の上昇は、1850年にホノルル在住の白人達が文芸クラブ協会を結成し、図書館をつくるとともに講演会を催したことの上にも現われている (同上, p. 85)。1845年にホノルルを訪れた旅行家によれば、ホノルルには「領事、その他の官員、船長や商人、それにアメリカ人やイギリス人のご婦人方から成る高度に知的で洗練された性格の社交界」(同上, p. 85) がすでに存在していたという。これら「知的で洗練された」白人在留者達には、もはや、酒と女が唯一の娯楽と

いう初期の寄港地の粗野な生活形態は無縁なものとなりつつあった。多くの家庭はピアノを備え付け、アマチュア楽団が結成され、けいこや演奏会に勤しんだ。また1847年には初の劇場が建てられ、1853年にはホノルル市は3つの劇場を持つことになった(同上, p. 86)。こうしたホノルル在住の白人の生活形態の西洋文明化が急速に進む1840~50年代は、まさに砂糖プランテーションの開花期と一致している。

フィジーのレヴカにおける生活様式の変化はホノルルより20~30年遅れ、綿花ブームで入植者が流れ込んだ1870年代初頭に生じた。白人社会の変化を告げるときの声はフィジーでもやはり、新聞であった。1869年発刊された『フィジー・タイムス』は、レヴカの町から離れた地方の農園に住む入植者達の置かれている「蛮族との親交」状態への解毒剤とみなされ、1871年までに部数1000部を越えるまでになった(Young [1970], p. 160)。またホノルル同様、読書室がつくられ、この読書室を境として新たな街区が形成されていった(同上, p. 159)。この新街区には旧街区に多数住んでいた白人・フィジー人の混血の住民は見られず、同時代のオーストラリアやニュージーランドの街同様、ヴィクトリア朝時代のコロニアル・タウンの様相を呈していた。そうした町や地方の農園では、家は現地風ではなく、やはりオーストラリアのコロニアル・タウンの様式で建てられ、家の中はヴィクトリア朝様式の工芸品で埋められた。とりわけそうした家の住人の文化的アイデンティティを象徴するものはピアノであった(同上, pp. 155-156, 161)。そしてそれらヴィクトリア朝様式の家々ではコンサートや舞踏会が催され、更にはフリーメーソンやチェス愛好家、アマチュア俳優などのクラブや社交団体も結成され、言わば本国中流階級の文化がごっそり移植されていったのである(同上, p. 160)。

酒と女という単純な楽しみなら在留白人と容易に共有できた太平洋の島民達も、こうした19世紀西洋のスノッパな文化には全く入り込む術を持っていなかった。こうして白人社会に入植者の比率が高まるにつれ、白人と現地島民の間の人種間分離が急速に進行していったのである。

とりわけこうした在留白人の本国文化化と人種間分離を促進する触媒として働いたのが、白人女達であった。

入植者が増大する以前の、寄港地が島の特産品の遠隔地交易や入港する船乗りたちの慰安や物資補給で成り立っていた初期の時代には、島々の寄港地に住み着いた白人達は大多数が現地の女たちを妻にしていた。酒と売春と喧嘩騒ぎの絶えない荒々しい寄港地に渡ろうという白人女の数は非常にすくなかったのである。サモアでは1876年においてすら、在留する白人の女の数は5～6人にすぎず、うち未婚の女はたったの2人という状態であったという (Moors [1986], p. 40)。そうした初期の在留白人が妻を娶ろうとすれば現地の女に頼らざるを得なかったし、おまけにそうした結婚は白人の夫にも少なからぬ生活上の便宜をもたらしてくれたのである。多くの島々では、白人は巨大な富と強力な武力を持つ異世界から訪れた異邦人であるということから、本国でなら最下層民であった者が島の首長クラスの待遇を受け、支配層の娘達を娶ることも稀ではなかったのである。

それが入植者の増大につれ、在留白人の間には本国で妻を求めようとする傾向が強まり、また、単身島々に渡ってくる独身の女も現われてきた。1866年には4～5人の白人女しかいなかったフィジーのレヴカでは1868年には白人女の数が91名に増え、1870～71年にはレヴカに到着した1422人の白人のうち356人は女が占めるまでになった (Young [1970], p. 154)。

これら白人女達は本国での生活水準を夫達に求め、男達は白人妻との暮らしの中から本国中流文化のスノッパな価値観や性道徳を受容していった。たとえばフィジーのレヴカに突堤がつくられたのは白人女達が船から岸边まで「半裸の蛮人の手に抱かれて」運ばれることを拒んだことが主因であったし、近くの池で水浴びをする習慣が問題となったのも、白人女達が「半文明化された蛮族の無作法な視線や白人達のより一層無作法な視線」に我慢がならなかったからである (同上, pp. 156-157)。また、白人男と島の女達の性交渉は白人の女達の憤激的となり、許し難い不道徳な振舞いと見なされるようになった (同上, p. 157)。

こうして太平洋の寄港地は、近代文明の規矩や束縛から逃れ、寛大な島民達の下で倫理的真空状態を享受する流れ者達の世界から、近代文明の便益とともにその価値観や道徳が運びこまれた、本国社会の縮小模型へと大きく変貌を遂げていったのであった。

第10節 白人入植者による土地集積と島嶼王国の変容

こうした入植者達を中心とする新しい白人の波は、南太平洋の島々においても本国同様の政治制度や法的扱いを受けることを望んだ。たとえば入植者達が何よりも必要としたものは土地であったが、従来、南太平洋において土地を付与されるということは、付与する集団に帰属し、その一員になることを意味した。集団の一員になるということは、その生活習慣や規範に服し、その行事に参加するということで、それは初期の西洋文明世界を捨てた流れ者にとっては生きていくためには自明の前提であった。しかし今や進んだ近代文明の一員を以て自認する新しい白人移住者達にとっては、遅れた未開の島民達の生活習慣に身を屈するということが我慢のならない屈辱的事態であった。彼らは周りの村落社会から孤立して、自分の土地の中では自分が主となって生活を取り仕切ることのできる小空間を作り上げることを欲した。そして、その空間の中で貫徹さるべきは農場主と賃労働者の間の資本主義的關係であるべきであった。また、そうならなければ、砂糖キビなら西インド諸島など、棉花ならアメリカ南部やエジプトなどの同業者との競争の中で生き延びることは到底不可能だったのである。

こうして南太平洋の島々の至る所に伝統的な村落社会とは全く異質な資本主義農場が出現し、島々の地表面を蚕食していったのである。ハワイでは、1848年に制定された土地所有法の下で、私有地と指定された土地の4分の3が1890年までには白人の手中に納まっていた(タカキ [1986], p. 28)。更にすさまじいのがサモアで、ここでは統一国家もなければ近代的土地所有法も存

在せず、首長達が相争う内戦状況の中で銃器とひきかえに土地が白人達に次々と「売られ」、ついには白人ブローカーの「買い入れた」土地面積の総計がサモアの全土地面積の2倍に達するという事態にまで立ち至った (Davidson [1967], p. 64)。無論ここでの土地の「売り買い」は白人ブローカー側の一方的解釈であり、サモアの首長達は近代的所有権という意味で土地を「売った」などとは全く考えていなかったのである。

このように南太平洋の陸地に対する白人の進出は、いかがわしい土地投機家によるいかがわしい土地取引を大量に生み出した。単身または家族で本国から太平洋の島々に着いたばかりの、言葉もしゃべれなければ現地とのコネクションもない入植者が、いきなり土地を手に入れる交渉をできるはずがないのである。そこで現地社会と入植者の間に立って、土地を現地側から「買い」、入植者に売るブローカーの存在が不可欠となってくる。たとえばサモアにおける中央ポリネシア土地・商業会社、フィジーにおけるポリネシア土地会社などがその代表的存在である。こうした土地ブローカーが相手とするのは(島々の)王や首長達であり、ブローカー達は彼ら現地支配層や現地駐在領事とのコネクションはもとより、本国の政治家にまで手を伸ばし、土地集積に暗躍するのである。彼らの利益の源泉は現地支配層から土地を「買い」、それを個人入植者に売る時の、現地側と白人側の土地所有に対する評価の落差から生ずるものである。これは、初期の白人交易商が白檀やナマコを島々の現地支配層から安く手に入れ、高く評価される中国市場で大きな利を稼いだのと同じ構図である。つまり、19世紀後半には、文化間の価値落差を利用して巨利を博する商業資本の投下対象が島々の特産品から島々の土地へと転換したのである。

しかし白檀やナマコは海を運んでいけるが、土地は動かすことができない。そのため一枚の土地に現地社会と白人側の両方から二重に所有権が主張されることになる。ここに土地を「売った」現地島民と「買った」白人入植者の間の係争の根があった。

白人入植者は入植地の土地所有権を確固たるものとするため何らかの形で

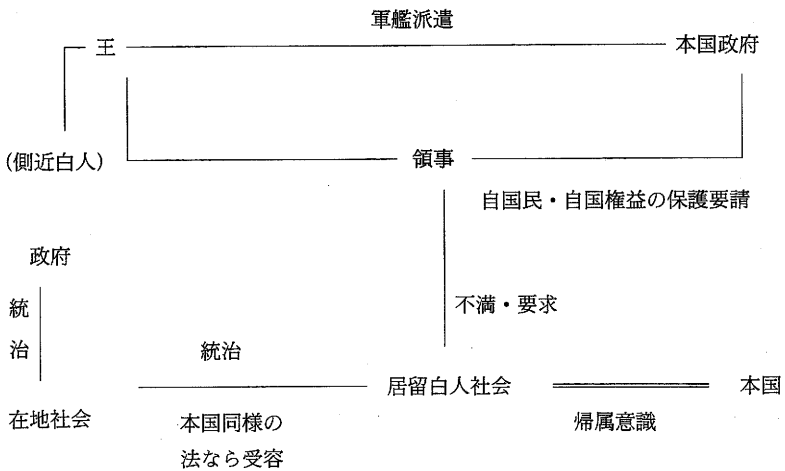
の政治的保護を必要とした。そしてそれには二つの方法があった。一つは現地支配層と結び、彼らに近代的土地所有権を保護するような政府を樹立させること、今一つは島々をそっくり本国の植民地か保護領にしてしまうことである。勿論後者の方が望ましかったが、本国政府の側が統治コストと列強間の勢力均衡の攪乱を恐れて躊躇した。そこで白人達は自分達に良い政体にするために然るべき「法と秩序」を現地支配層に要求した。

これは西洋列強から独立した国家として認知されることを望む現地支配層の意向と共鳴し、太平洋の島々に近代的法典が次々と生み出されていくこととなった。

こうした法典のうち最も早いものは、1819年にポマレ二世が宣教師達に作らせ、自らタヒチ語に翻訳した法典であるが、これは政体を規定した法典というよりは、キリスト教的立場に立って、盗み・姦通・妻子遺棄といった項目を主とする道徳的な律法の性格が強いものであった (Newbury [1980], pp. 50-51)。

本格的に政体を規定する法典が作られたのはハワイであった。それは近代的西洋文明の優越感を携えてきた白人達がハワイの支配層による統治を拒否し、本国に保護と償いを求めたことにより促されたものであった (Kuykendall & Day [1948], p. 53)。カメハメハ三世は宣教師達の助言を受け入れながら、全人民の平等と生命・身体・自由などの天賦の権利をうたったハワイ版マグナ・カルタ (1839年)、人民から選ばれる代表組織を制定した憲法 (1840年)などを発布することにより、在留白人の内からの外圧と、西洋列強の砲艦外交による外からの外圧をともにかわそうと努めたのである (同上, pp. 54-55, 63)。こうした努力は見事に実を結び、1840年から43年までの間にハワイは米・英・仏の三強から独立国としての認知を獲ち取ることに成功する。ハワイ最初の砂糖キビ・プランテーションの土地も実は列強に認知されることを条件として貸与されたのであった (同上, p. 64)。このように太平洋の島々における法典作成と近代的立憲君主政体の装いは、一方で白人入植者の土地取得要求、他方では列強政府による国家としての認知という内外二重の圧力

図3 19世紀中葉以降の島嶼王国への白人勢力の関与と圧力



(出所) 筆者作成。

の下に進められていったのである。

こうした太平洋の島々における立憲政体化をめぐる構図を図式化すると図3のようになる。

ハワイでは、三列強による独立認知後も、1843年イギリス軍艦艦長による占領、1849年のフランス領事と軍艦によるホノルル占拠など、砲艦外交による主権の侵害は相次いだ。こうした絶えざる外からの脅威の下、カメハメハ三世は内閣を編成して近代的行政府を創出し、王室の家計を国家会計から分離し、ハワイ全土を王や首長による政治的支配の対象から経済的所有の対象へと移し替え、司法制度を整えるなど、更に一層、近代化を推進していった。とりわけ土地所有制度の変更は、ハワイの土地を、王や首長が、その土地の上に住む居住者も含めて支配する政治的領土から、純然たる経済的所有地へ変えるものであり、この結果、王や首長は領主としての在地社会への直接的支配を放棄し、単なる地主へと身分を移したのである。王や首長の領主とし

ての支配に代わって、在地社会を統治することになるのは、新たに創られた近代的行政府となるはずであった。ハワイにおいては、ここに王や首長の伝統的領土支配は終焉し、王や首長達の在地社会から切り離された貴族化の歩みはここに法的に完了するのである。そして飽くなき消費生活によって背負い込んだ負債を支払うため、貴族層は白人達に土地を売却してゆき、ハワイの私有地は白人居留民のもとに集積されることになる。こうしてハワイは白人入植者や資本家によるプランテーション経済によって全土を覆われていくのである。

ハワイよりも遅れて統一を達成し、ハワイと同様列強からの認知をかち取るうとしたトンガのトゥポウ一世も、ハワイの立憲君主体制を参考に法典を作成・整備していった(Lātūkefu [1974], pp. 163-165, 204-210)。更に遅れて、長い内戦の後、首長間の勢力均衡の下、もろい統一を作り上げたサモアも、ハワイをモデルとした。またイギリスによって植民地化される直前、政府をつくったフィジーにおいても、政体の素案をもたらしたのはハワイ領事のサン・ジュリアンであった。

このように、1842年に早々とフランスの保護領(実際には植民地)となったタヒチを除いて、太平洋において王国を形成した島々はその政体のモデルをハワイに求めたのであるが、こうした立憲政体化をめぐる力の構図もやはり、ハワイの時に現れたものが繰り返されることとなるのである(図2参照)。

太平洋の島嶼王国への圧力は三方からやってきた。まず、第一は居留白人達。彼らは、数を増し、集住し、更に土地を手に入れるに従って、現地文化に適応しようとした初期の放浪白人時代から、自分達白人社会の独立性を維持・増大させようとする段階を経て、ついには自らの優位を確信し、王国も自分達に合うよう行動すべきであると主張するまでに至る。第二は領事達。彼らは島嶼王国における本国政府の代表であり自国民の保護者であるという立場を背景に、島嶼王国と本国政府の政策形成に大きな影響力を及ぼした。たとえば、本国政府に対する彼の報告が、島嶼王国に関する「事実」となり、それに基づいて本国政府の政策は策定された。こうして本国政府の政策には

領事の意向が多分に反映されることになる。

また領事達は、本国政府の、とりわけ軍艦の威光をかさに、あからさまに太平洋の島嶼王国の内政に干渉することも稀ではなかった。たとえば1893年、ハワイにおける白人居留民が王朝転覆のクーデターを起こした際、アメリカ公使スティーブンスは自国軍艦の海兵隊を上陸させてクーデター派を援護し、本国政府の承認も経ずに白人クーデター側の暫定政府を承認した（中嶋 [1993], pp. 91-93）。またサモアでは、1875年マリエトア・ラウペパを王とし、アメリカ人スタインバーガーを首相とする政府の成立後、スタインバーガーの政策に不満を抱いた英米両国の領事は、英国軍艦の寄港を機に王を艦上に軟禁し、スタインバーガーの国外追放に同意させた（Robson [1965], pp. 68-79）。

このように、領事達の影響力は自国軍艦を背景にした時、初めて巨大な力を発揮し得た。この軍艦が島嶼王国が直面せざるを得なかった第三の圧力源である。

19世紀、太平洋を遊弋していた軍艦は大きいものになると百六十門もの大砲を搭載していたと言われ（室賀・矢守編訳 [1965], p. 186）、一艦で優に島嶼王国の首府を占領下に置く力を備えていた。前記、ハワイの王朝転覆クーデターでも、サモアのスタインバーガー追放劇でも、実際に動いたのは一隻の軍艦だけである。また、1842年、タヒチをフランスの保護領（実質的には植民地）にしたのもやはり一隻の軍艦であった。こうした力を備えた巨大な船が水平線を破って突如現れ、また突如去っていくのは、島嶼王国にとって大いなる脅威であった。水平線の彼方は、こうした西洋の軍艦の支配する世界であり、軍艦がいつ水平線のこちら側にやってくるのかは知る術もなかった。そして一度軍艦が寄港し、あれこれの要求を行う時には、諾々と従い、嵐の通り過ぎる時のようにやり過ぎすしかなかった。

第11節 伝統的貢納体系としての国家と近代的立憲君主制 としての国家の背反

こうした軍艦による脅威から逃れるため、島嶼王国は、列強の一つの保護下に入り、他の列強から守ってもらうという方便に訴えた。こうした保護下の申し入れは、1794年、統一途上のカメハメハ一世がハワイをその保護の下に置くようイギリスに依頼した時から始まり、トンガを除く全ての島嶼王国の歴史に繰り返し現れてくる現象である。たとえば、ハワイにおいてはカメハメハ二世が1823年イギリスへ赴き、その力を借りようとして客死、1851年にはカメハメハ三世治下のハワイ王国がアメリカによる併合を望んでいるとの報告が、アメリカ公使によってなされている (Kuykendall & Day [1948], pp. 74-75)。またタヒチにおいては、フランスによる力づくの保護領化の動きに先んずるため、1842年、女王ポマレ四世はイギリス領事ブリッチャードにイギリスによる保護領化を依頼したが、ブリッチャードのロンドン滞在中に、フランスによって占領されてしまった (Craig & King [1981], p. 247)。更にフィジーにおいて、統一への過程を歩んでいた大首長ザコンバウは、フィジー人によるアメリカ合衆国貿易代理人ウィリアムス宅への焼打事件に対する法外な賠償要求を、寄港するアメリカ軍艦から繰り返し突き付けられたため、イギリス領事ブリッチャード (息子) に、アメリカ政府への賠償金を肩代わりしてもらうという条件で、イギリスへの保護領化を要請した (Derrick [1946], pp. 132-139)。サモアにおいても、1875年、首長達の作った連合政府はアメリカによる保護領化を要請、次いでドイツ領事の賠償請求を受けた1877年にはイギリスに、ドイツによる併合の脅威が高まった1884年には再びイギリスに、保護を要請している (Davidson [1967], pp. 59-60)。これらの保護領化の要請は列強政府・議会の拒否でいずれも実現することなく終わったが、島嶼王国がいかに軍艦の前に無力を感じ、危機に臨んでは強者の保護に頼ろうとする傾向がいかに強かったかを、雄弁に物語っている。

こうした安易とも思われる保護領化の要請は、しかしながら島嶼王国にとってはきわめて自然な発想であった。というのも、そもそも太平洋の島々の伝統的な統合のあり方は統治する者が統治される者に保護と自治の権を与え、統治される者は代わりに貢納と徭役を捧げることによって成り立っていたからである。19世紀に成立した島嶼王国はこうした伝統的朝貢システムとしての統治概念を外挿して、イギリスを始めとする列強への保護領化要請を行なったのであった。力の無い下位首長が自らを最も良く遇してくれる高位首長の保護下に入るのと同様に、島嶼王国の王達が最も安心のできる列強の保護下に入ることはごく自然な選択なのであった。

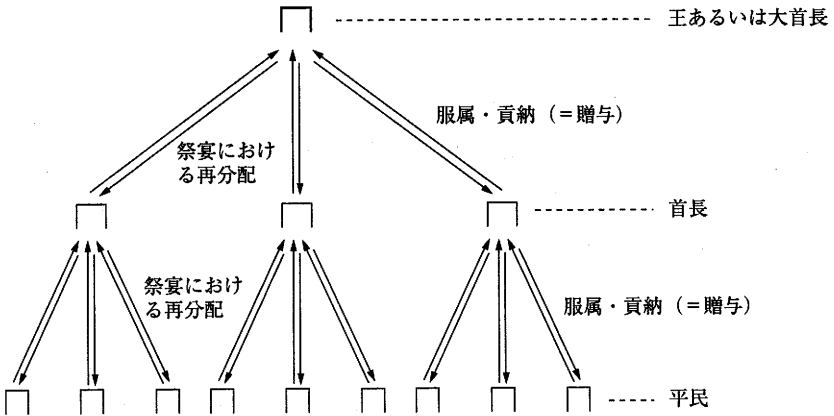
ここに、19世紀西洋近代文明の到来をきっかけに成立した太平洋の島嶼国家の原像が浮かび上がってくる。すなわち朝貢体系としての国家である。村落から始まり、首長、大首長、更には王と連なる政治統合の上での各分節は、各々その内部自治権を保持しながら、それより上位の分節に対し、服属のしるしとして貢納（＝贈与）と徭役・軍役の奉仕を行うことによって統合されている（図4）。

こうした統合形態においては、下位の分節はそれぞれ貢納と徭役を果たしている限り、自分達の内部に関する決定は上位の分節からの干渉を受けることは少ない。すなわち、朝貢体系としての国家の統合はきわめてルースなのであり、各々の分節の内部自律性はきわめて強いのである。

このような国家では、法は分節の数と同じ位多様であって、単一の法体系がその領域内で均一に適用される近代国家のあり方とは、対極にある。

ところが太平洋の島嶼王国は軍艦・領事・居留白人からの三重の圧力を受け、独立国としての認知を得るため、単一の法典によって王国内を均一に支配するという立憲君主制の仮面を被らざるを得なくなったのである。こうして太平洋の島嶼王国は、外に向けては近代的立憲君主国家、内に向けては朝貢体系国家という相矛盾する二つの国家原理を懐胎することになったのであった。そして外なる西洋近代文明との接触領域が寄港地という一点から、入植者によって王国のいたる所へ面として拡がっていくにつれ、外に向けた

図4 白人到来以前のポリネシアの分節国家構造



(出所) 筆者作成。

顔と内に向けた顔の使い分けは不可能となっていたのである。

第12節 島嶼王国の終焉

こうした中で、太平洋の島嶼王国はそれぞれ固有の道をたどってその行路を終えつつあった。サモアは最後まで立憲君主政体という仮面を伝統的政治構造の上にうまく被せることができず、内戦や王の追放・交代を繰り返し、ついにはベルリン会議による植民地分割によってドイツとアメリカに分割された (Meleisea [1987], pp. 41-42)。フィジーは、朝貢体系国家としても統一を完成することのできなかつたザコンバウが、急激に数と発言力を増した白人居留者の圧力を受けて、大急ぎで立憲君主体制をつくるが、破綻の末、イギリスに破綻した国家の管財人になってくれるよう、フィジーの統治権を差し出した (Derrick [1946], 第20, 21章)。他の島嶼王国に先んじて立憲君主政

体化を進めていったハワイの王朝は、土地とともに国家機構を白人に乗っ取られ、ついにはそこから放逐されることとなった（中嶋 [1993], pp. 76-80, 86-96）。タヒチは立憲君主化を十分に進める暇もなく、どの島嶼王国よりも先に、列強の一つフランスによって併合された（Newbury [1980], 第4章）。こうして19世紀の末に残った太平洋の島嶼王国は、トンガただ一国となったのである。そのトンガも1899年にはイギリスの保護領となるのだが、列強の領土や植民地となった他の島々とは異なり、トンガではその後も王朝が存続し、内政自治権も大幅に認められることとなった。

島嶼国家としてのトンガ王国の存続を可能ならしめた条件を考えていくと、まず統一者トッポウ一世が1893年まで在世し、王国の手綱を締めて放さなかったということが挙げられる。すでに述べたように、朝貢体系としての島嶼王国の浮沈は支配者個人の統治能力とその威信に負う所がきわめて大きかった。しかし、王国の興亡が個人の人格の上のみかかっているわけではもとよりない。より重要なのは支配者がどのような施策を打ち出したかであるが、トッポウ一世は他の島嶼王国の成し遂げ得なかった二つの政治的業績を達成した。一つは外国人による土地の購入を禁止し得たこと、もう一つはトンガにおけるキリスト教組織を本国宣教団から切り離し、自らを長とする国教会へと再編し得たことである。ハワイでもサモアでもフィジーでも、白人への土地の売却が、白人勢力の島内への侵入を促し、島嶼王国の政治に対する白人勢力の圧倒的発言力を生み出すこととなったのだが、トンガは土地売却禁止令を通じて、白人入植者の内陸への進出を抑制することに成功した。こうした白人入植者の阻止が可能だったのは、トンガがハワイやタヒチのように太平洋海上交通路上の要地ではなく、比較的白人の進出が遅かったことも大いに与って力があつた。また国内のキリスト教組織を宣教団の手から取り上げて自らの支配下に置いたことによって、宣教団を仲介者とする国内不満分子と外国人居留者の連携の根を断ち、更にはキリスト教という異物をトンガ人ペースでトンガ文化の中に取り込んでゆくことが、可能となった。こうして、トンガ国家は在地社会と外部世界の間立って、文化的緩衝帯の役

割を果たし、無制限な西洋近代文明の流入を効果的に排除し得たのである。そしてこれこそ、他の島嶼国家が目指しながら果たせずに終わった究極の目標だったのである。

第13節 水平線の破壊と島嶼王国の形成——その文明史的意味

太平洋の各所における島嶼統一国家形成の動きは、文明史の視点から見れば、近代西洋文明の出現という衝撃を受けた島々の防衛反応と見ることができる。太平洋の島々が持っていたカヌーからは想像もつかぬ巨大な帆船に乗って水平線の彼方から来訪してきた白人達は、島嶼民にとって、予想だにしない、伝統的世界像の外から闖入してきた異人に他ならなかった。それゆえ、ハワイの島民は、キャプテン・クックを、島から神話的過去に水平線の彼方へ去り、年に一回回帰してくるロノ神と同一視し、トンガやサモアでは、白人のことをパパラギ「天空を突き破って出現した人」と呼んだのである。いずれにせよ、白人達は島嶼民達の馴れ親しんだこの世の外からやってきたエーリアンであったことを示している。

とりわけ、トンガやサモアにおける白人の呼称、パパラギ「天空を突き破って出現した人」という表現は興味深い。なぜ、水平線の彼方から現れてきた白人達が「天空を突き破って出現してきた人」となったのか。

ドイツの現象学者、オットー・フリードリッヒ・ボルノウは、ヴァン＝ペールセンの論文を採用しながら、地平線はまず「天空がそこで地面に接してその上に乗っているように見える線」として規定できると言う（ボルノウ [1978], p. 73）。地面を水面に換えれば、そのまま水平線の定義とすることができるであろう。つまり、天空が水面と接し、そこで尽きるような線である。それゆえ、水平線は水面に属するとともに、天空にも属するような境界線なのである。ここからパパラギ「天空を突き破って出現した人」という表現が現れてくる。ボルノウによれば、地平線は天空と結ばれることによって、そ

れを見る者を取り囲む輪から、その者をすっぽりと包み込む被いへと拡大し、それによって安定した世界秩序を与えて「世界を一種の庇護する家屋となす」（同上、p. 73）という。太平洋島嶼民達にとって、水平線の彼方からの白人の到来はまさしく、安定した世界像を突き破ってその外から到来した異世界からの闖入者だったわけである。パパラギという呼称には、水平線と天空が形作る、馴れ親しんだ「一種の庇護する家屋」が破られた時の、強烈な衝撃が余すところなく表現されていると言えよう。

こうした世界像の破れは、島嶼社会に世界の内と外の再区分を要請せずにはおかなかったであろう。それまで絶対的な世界の果てであった天空と水平線の外に、更に異なる世界が広がっているという事実。そこから、自分達の世界へ新たに侵入してきたこの異世界をどのように認識の中に取り込み、異世界からの訪問者にどのように対応してゆくか、更にはそれを自分達の世界の中にどう取り込んでゆくか。太平洋の各所における、タイム・ラグは伴いながらも並行して進められた王国統一の動きは、近代西洋世界の侵入という異常事態を受けて始まった、太平洋（特にポリネシア）島嶼諸地域の文化再編運動の一環として捉えられるのである。そして、一言以て約するならば、統一王国の形成は白人によって突き破られた世界の境界を再び創りだす運動であったと解することができる。

突き破られた世界の裂け目から、鉄斧やナイフのように鋭利なもの、酒やタバコのように心を魅惑してやまぬもの、鉄砲や疫病のように恐るべき殺傷力を持ったものなどが一気に流れこんできた。鉄斧や綿布は瞬く間に先祖伝来の石斧やタバコを駆逐し、酒やタバコは島民達を惑溺させ、鉄砲は戦いを大量殺戮の場と変え、目に見えぬ疫病は知らぬ間にそっと忍び込んできて、容赦なく人間の命を奪い去っていった。

こうした、伝統文化では統御し得ない、異世界からの異物の流入を統制下に置くこと、そしてあわよくば異世界の持っている途轍もない力と富をわがものとする、それがまず、統一王国に課せられた課題であった。そのためにタヒチの統一者ポマレ二世は文字を学び、キリスト教に改宗し、本や地

図を集め、更には幾何学にまで手を伸ばそうとした。全て、新たに出現した水平線の外なる異世界を何とか認識の俎上に乗せ、我が物としようとする努力の現れであった。ハワイのカメハメハ二世は伝統宗教の禁忌を撤廃し、キリスト教に改宗すると、自らその眼で異世界を見ようとしてロンドンへ赴き、その地で客死した。トンガのトゥポウ一世やサモアのマリエトア・ヴァイヌボは、白人宣教師を自らの統治する島に招来しようと躍起になった。全ては、異世界を認識し、我が物とする鍵を見出そうとしてのことである。

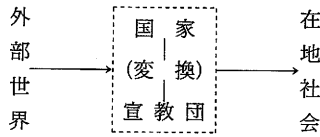
そしてその鍵はキリスト教と文字にあると、太平洋の島嶼王国は結論を下した。太平洋においては、キリスト教改宗熱と文字習得への熱狂は手に手を相携えて進行した。王や首長達の肝煎りで建てられた教会はまた、文字を民衆に教えるための学校でもあった。

トンガでは、「子供が親に文字を読んで見せ、文字を習い覚えた者が遠く離れた友人に文字を教えに行き、文字を知らぬ者達の前で文字を読み上げることに大いなる喜びを覚えた」(Lātūkefu [1974], p. 56) という。そもそも、文字という伝達手段が、無文字文化の太平洋の島民達にとっては、驚嘆すべき魔術として受けとられたのである。

1804年、トンガで捕われ、土地の首長の配下となったウィリアム・マリナーは一切の本や紙類を焼くように言われたが、その理由は、文字が邪神への呪文であり、トンガに害をもたらすからである、というものであった(Mariner [1979], p. 56)。後に、その首長はマリナーに書かせた自分の名を、その場に居合わせなかった別の白人が文字を見ながら読み上げるのを見て、「こうした名前や状況が(離れた場所に居た者に、文字という)神秘の通路を通して伝えられるのはどうしてなのか、全く理解を絶する」(同上, pp. 114-115) と驚嘆すると共に、飽くことなき好奇心を示したという。

こうして、聖書をキリスト教信仰と規範の出発点であると同時に到達点ともする聖書原理主義者であるプロテスタント宣教師の識字への重視と、文字を近代西洋文明という異界の富と力の鍵となる魔術だとみなす太平洋の島嶼民の発見とが、偶然にも合致することによって、太平洋の島々では急速に文

図5 島嶼国王と宣教団の結合による文化的浸透膜の形成



(出所) 筆者作成。

字が普及してゆく。1822年にハワイに到着したアメリカの宣教団の学校に就学するハワイ人は、2年後の1824年には2000人、1826年には25000人に達し、1831年にはハワイ全土で1100の学校が存在し、人口の40%が読み書きが出来る状態になり、19世紀中盤までには、たいていのハワイ人がハワイ語の読み書きができるまでになったという (Kuykendall & Day [1948], pp. 79-81)。

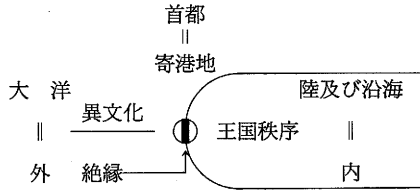
キリスト教への改宗とは、太平洋の島民達にとって、実は文字の魔力を身につけることとほぼ同義であったのである。

こうした島嶼文化のキリスト教化=文字文化化という基盤の上に、一夫多妻の禁止、裸身の禁止、祝祭や踊りの禁止、安息日の遵守など、プロテスタント的規範に則った成文法が公布される。それによって、近代西洋文明の侵入によって生じた飲酒・売春を始めとする秩序紊乱状態を封じ込めようとしたのである。

これが統一王国による島嶼文化再編の第一の局面であった。この局面を図式化すれば、プロテスタントの宣教団と手を結んだ国家が、近代西洋文明という外部世界から押し寄せる波への防波堤となって、そのうち利用可能なものを島内の在地社会へ選択的に伝播させようとしたという風に表現できる (図5参照)。

幸い、外部世界である西洋からの到来者は、ハワイならホノルル、タヒチならパペーテといった寄港地を目的地として島へやってきた。それゆえ、寄港地という一点を封じ込めさえすれば、そこから先の内陸への、異世界からのカオスの侵入は抑えることが出来た。19世紀前半に国家統一を成し遂げたハワイ・タヒチ・トンガがいずれも寄港地を首府としたのは、外部世界の侵

図6 寄港地における新たな内と外の分割



(出所) 筆者作成。

入を寄港地で食い止め、そこから先は自らの許容する秩序で覆うという意図に発するものであったと解せられる。

このように寄港地という一点を異世界との接触点として開き、その他の全土を宣教団と結び付いた国家秩序で囲い込むこと、これが、統一王国が島嶼文化再編を通じて行った世界の内と外への再分割である(図6)。

水平線という、世界の果てを画する境界線が西洋船によって突破された後、島嶼社会は、内と外を分かち境界を寄港地という一点に設定し直すことによって、島嶼社会を庇護する皮膜を新たに作り出そうとしたのである。

だが、19世紀後半に始まった白人の入植活動による島の内部の土地取得は、こうした島嶼社会の再編された秩序を再び掘り崩してゆくこととなる。

島の内部に土地を獲得した白人は、ハワイのフーパーのように、島が近代西洋文明秩序で覆われることを、しかもその秩序の中で自分が主人となることを、文明と進歩の名の下に要求するにいたる。こうして島嶼王国は、水平線の外からは軍艦によって、寄港地においては領事によって、島の内部からは白人入植者によって西洋的立憲君主政体をとるよう迫られ、自らは運営能力を持たない立憲君主制国家機構を設立する。しかし、その運営能力の欠如から、国家機構は白人に乗っ取られるか(ハワイ)、運営に失敗して破綻するか(フィジー、サモア)して、島嶼現地人の手からずり落ちてしまうのである。ただトンガ王国のみは、外人への土地の売却の禁止により、白人の内部化を防ぎ、学校教育を宣教団の手から取り上げ、更には教会そのものを宣教団から国家に回収することによって、島嶼社会の秩序の内部に白人勢力が入り込

むことを極力排除し、島嶼社会を保護する皮膜としての機能を果たし続けたのである。

数千年の歳月をかけて、ハワイ人やタヒチ人やトンガ人など島々の住民の祖先達がカヌーを使って太平洋全体にゆっくりと拡散して行って以降、白人の到来する18世紀末にいたるまで、太平洋は外部世界に対して巨大な壁として立ちはだかっていた。この巨大な壁によって水平線を守られていたオセアニアの島々は、ユーラシア大陸やアメリカ大陸の文明世界から絶縁され、独自の文化と社会を育てていった。この太平洋という巨大な壁を西洋の航海テクノロジーが突破した時、太平洋の島嶼民にとって、海は外界を遮断する皮膜から、外界に向けて大きく開かれた公道へと一変したのである。18世紀後半の英仏による相次ぐ探険航海と太平洋の全貌を明かす太平洋全図の完成は、島々から太平洋という皮膜を奪いはぎとり、丸裸にしてしまったことを意味する。

18世紀から19世紀にかけての太平洋の諸群島における王国統一への動きは、言うならば、西洋のテクノロジーによって奪われてしまった太平洋という自然の皮膜に代わるものを人為的に創出しようとした過程であると見ることができる。その際、西洋の大型帆船が港という局限された空間においてしか陸地と安定的に接続できないことを利用して、寄港地という海岸線の一点が境界として設定された。

こうして、島々にとって水平線のはるか外に限りなく広がっていた太平洋という巨大な境界面が今や一点に収縮してしまったのである。

19世紀に統一された太平洋の島嶼国家は、こうした寄港地の上に立って、外なる海の世界と内なる陸の世界の直接接触を絶縁すると同時に、自らを通じて二つの世界を接続させ、媒する役割を背負った。その意味で、太平洋の島嶼国家は外と内、海洋と陸地の境界領域として成立したと言い得る。太平洋上の統一国家がいずれも外界との接点である寄港地を首府としたのは国家自体の境界性を雄弁に物語るものである。

大陸上に成立した国家とは異なり、太平洋上に浮かぶ島嶼国家は、地続き

で隣接する異国を、したがって、国境線というものを持たない。太平洋の島嶼国家にとって、異国は目に見えないはるか水平線の彼方に存在するにすぎないのである。そして、国境というものがあろうなら海洋全体が国境である。西洋列強によって水平線が破られ、海洋が制圧されて、異国との境界が水平線の彼方から波打ち際まで一気に押し寄せてきた時、寄港地とそこに首府を置く国家の創出は、太平洋の島嶼社会が、海岸線にまで迫り来たった西洋の異人達とその影響力の無際限な侵入を防ぐために敷いた背水の陣であった。それが破られた時、島嶼社会には白人入植者をも含みこんだ秩序を再編する術はもはや残されてはいなかったのである。

[注] _____

- (1) この接触を記録した資料としてはRobertson [1955] がある。またウォリスとタヒチ島民の最初の遭遇を1830年代に、タヒチ側の伝承を描いたものとしてはMoerenhout [1993] があり、本章の記述は主として両者を参照した。交易の実態についてはNewbury [1980] が詳しい。
- (2) キャプテン・クック隊は初めて正確な太平洋全図を作り上げた。

〔参考文献〕

〈日本語文献〉

- タカキ (富田虎男・白井洋子訳) [1986], 『パウ・ハナ——ハワイ移民の社会史』刀水書房。
- ダニエルソン, B. (中村三郎訳) [1984], 『タヒチのゴーギャン』美術公論社。
- 中嶋弓子 [1993], 『ハワイ・さまよえる楽園——民族と国家の衝突』東京書籍。
- マーシャル, P.J. & G.ウィリアムズ (大久保桂子訳) [1989], 『野蛮の博物誌——18世紀イギリスがみた世界』平凡社。
- ブーゲンヴィル (山本淳一訳) [1990], 『ブーゲンヴィル世界周航記』岩波書店。
- ボルノウ, O.F. (大塚恵一・池川健司・中村浩平訳) [1978], 『人間と空間』せりか書房。
- 室賀信夫・矢守一彦編訳 [1965], 『蕃談漂流の記録1』東洋文庫39, 平凡社。
- メルヴィル, H. (坂下昇訳) [1982], 『オムー』国書刊行会。

〈外国語文献〉

- Bennet, J.A. [1987], *Wealth of the Solomons: A History of a Pacific Archipelago, 1800-1978*, Honolulu: University of Hawaii Press.
- Blackman, W.F. [1977], *The Making of Hawaii: A Study in Social Evolution*, New York: AMS Press (originally published in 1906).
- Craig, R.D. & F.P. King [1981], *Historical Dictionary of Oceania*, Westport: Greenwood Press.
- Davidson, J.W. [1967], *Samoa mo Samoa: The Emergence of Independent State of Western Samoa*, London: Oxford University Press.
- Derrick, R.A. [1946], *A History of Fiji*, Vol. 1, Suva: Government Press.
- Elsmore, B. [1985], *Like Them That Dream: The Maori and the Old Testament*, Tauranga: Tauranga Moana Press.
- Granville, K. [1979], *Fiji's Times: A History of Fiji*, Suva: Fiji Times.
- Haldane, C. [1963], *Tempest over Tahiti*, London: Constable & Co.
- Howe, K.R. [1984], *Where the Waves Fall: A New South Sea Islands History from First Settlement to Colonial Rule*, Honolulu: University of Hawaii Press.
- Kuykendall, R.S. & A.G. Day [1948], *Hawaii: A History from Polynesian Kingdom to American State*, New Jersey: Prentice-Hall, Inc.
- Lātūkefu, S. [1974], *Church and State in Tonga: The Wesleyan Methodist Missionaries and Political Development, 1822-1875*, Canberra: Australian National University Press.
- Mariner, W. [1979], *An Account of the Natives of the Tonga Islands*, New York: AMS Press (originally published in 1827).
- Maude, H.E. [1970], "Baiteke and Binoka of Abemama: Arbiters of Change in the Gilbert Islands," in J.W. Davidson & D. Scarr eds., *Pacific Islands Portraits*, Canberra: Australian National University Press.
- Meleisea, M. [1987], *The Making of Modern Samoa: Traditional Authority and Colonial Administration in the Modern History of Western Samoa*, Suva: Institute of Pacific Studies of the University of the South Pacific.
- Moerenhout, J.A. [1993], *Travels to the Islands of the Pacific Ocean*, Lanham: University Press of America (originally published in 1837).
- Moors, H.J. [1986], *Some Recollections of Early Samoa*, Apia: Western Samoa Historical and Cultural Trust. (originally published in from 1924 to 1926).
- Newbury, C. [1980], *Tahiti Nui: Change and Survival in French Polynesia*

- 1767-1945. Honolulu: University Press of Hawaii.
- Ralston, C. [1970], "The Beach Community," in J.W. Davidson & D. Scarr eds., *Pacific Islands Portraits*, Canberra: Australian National University Press.
- Robertson, G. [1955], *An Account of the Discovery of Tahiti*, London: The Folio Society.
- Robson, R.W. [1965], *Queen Emma: The Samoan-American Girl Who Founded an Empire in 19th Century New Guinea*, Sydney: Pacific Publications.
- Rutherford, N. [1971], *Shirley Baker and the King of Tonga*, London: Oxford University Press.
- Sahlins, M. [1992], *Anahulu: The Anthropology of History in the Kingdom of Hawaii, Vol. 1, Historical Ethnography*, Chicago: University of Chicago Press.
- Snow, P. & S. Waive [1979], *The People from the Horizon: An Illustrated History of the Europeans among the South Sea Islanders*, Oxford: Phaidon Press.
- Young, J. [1970], "Evanescent Ascendancy: the planter community in Fiji," in J.W. Davidson & D. Scarr eds., *Pacific Islands Portraits*, Canberra: Australian National University Press.